

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 14 日現在

機関番号：14602

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370205

研究課題名(和文) 中世名所歌集『歌枕名寄』の継承と変遷

研究課題名(英文) Inheritance and change of Utamakura Nayose

研究代表者

樋口 百合子 (HIGUCHI, Yuriko)

奈良女子大学・古代学学術研究センター・協力研究員

研究者番号：90625493

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：中世最大の名所歌集『歌枕名寄』の未調査の写本11本を調査し、その系統を明らかにし、その書写の過程で、それぞれの時代の文学的成果を取り入れながら、増補と略抄を繰り返し、常に変動していく歌集としての特性を解明した。さらに所収萬葉歌、特に長歌の『歌枕名寄』写本間の異同及び、萬葉集古写本との比較から、『歌枕名寄』所収の萬葉歌は、紀州本(巻十まで)に類似する非仙覚本に依拠するが、それと異なる漢字本文・訓を持つこと、仙覚訓と異なる新点歌を多く所収し、新点歌のかなりの数の歌が、仙覚以前にすでに付訓されており、それはこれまで明らかにされた歌数をはるかに上回るものであることを明らかにした。

研究成果の概要(英文)： This paper situates 11 not yet-investigated manuscripts of “Utamakura Nayose” firstly in a detailed examination. In their process of manuscripts copying, literature values of each period had been added to manuscripts, thus increase and decrease of poems compiled in them repeatedly occurred. This paper indicates this ever-changing nature as the features of the anthology. Furthermore comparison between Man'yo-shu Choka and “Utamakura Nayose” of waka poems and cross examination of manuscript copies and old copy of Man'yo-shu reveals that the number of waka poems compiled in “Utamakura Nayose” highly exceeds that of previously contemplated. Man'yo poems in the volume of “Utamakura Nayose” have their reliance on none-Sengaku Hon which is corresponding to Kishu Hon (up till the 10th). However, the different styles of Chinese characters and native Japanese pronunciations versions exist thus numbers of poems in new version had already been added before Sengaku.

研究分野：和歌文学

キーワード：名所歌集 歌枕名寄 万葉集 長歌 新点歌 仙覚

1. 研究開始当初の背景

(1) 平安時代から、『古今和歌六帖』をはじめとする、作歌の参考とすべき類題歌集が編纂された。歌語の一つである地名は、名所或いは歌枕と称され「特定の概念を伴う地名、固有の情緒が付着する地名」として、「詩的言語特有の機能」を持つ歌語の中でも、その占める地位は平安中期以降高まっていった。それに付随して地名の知識を得ることのできる書物が必要とされるようになる。早くに貫之歌枕・四条大納言歌枕が編纂されたと言われるが、いずれも現存しないため体裁は不明である。その後、『能因歌枕』『奥義抄』『和歌初学抄』など、一部に地名を類聚する(証歌を伴わない)歌書が次々編纂される。やがて地名のみではなく証歌を必要とされるようになる。証歌を伴う現存する最古の名所歌集は藤原範兼撰の『五代集歌枕』(平安後期、総歌集 1890 首、地名数 838)である。以後名所歌集は江戸時代に至るまで数多く編纂され、井上宗雄氏の調査によると江戸初期に至るまで七十書近く編纂されたという。その中で中世最大の名所歌集として、その後の類書に多大な影響を与えたのは『歌枕名寄』(全 38 巻 総歌数 7500 首 地名数凡そ 2800、いずれも流布本最善本の宮内庁本)である。

(2) 『歌枕名寄』の編者は巻一冒頭に「乞食活計客澄月撰」と記されているところから、「澄月」という歌僧と考えられ、長らく江戸時代中期に和歌四天王と称せられた歌僧澄月と混同され、成立も江戸時代とみなされていた。『歌枕名寄』の編者澄月は全くの別人であり、成立も内部徴証により、1280 年代後半と思われる。

名所歌集の編纂は、項目別(山・川・池などの項目別に歌を類聚)、いろは別、国名別の三種あり(他に二種の組合せ 項目別に類聚し更にいろは別に並べるなどもある)、『歌枕名寄』は国別編纂方式の嚆矢である。国名を 69 挙げ(吉岐・対馬を含む。越後のように

国名だけのものもある。一方未勘国として外国の地名も挙げる)、地名が多数ある国は篇名を挙げ細分し、地名や和歌の注も詳細に記すなど様々に利用者の便宜を計り、さながら地名事典の様相を呈する。

(3) 『歌枕名寄』は原撰本が伝わっていないため、成立時の姿が不明であるが、現存する完本で、証歌や地名が省略されたことを記す(各巻の巻頭に記され、写本により記される巻数は異なる)「略抄」という語を一巻も持たない写本は存せず、すべての写本が原撰本から略されたことを示している。このことにより原撰本は現存するどの写本よりも大部であったことが想定されるのである。しかし、また『歌枕名寄』は書写の過程で増補・改変されている。このように常に略抄・増補・改変を繰り返し、再生されていくのが『歌枕名寄』の特徴である。それは親本を一字一句間違わずに書写していくことが重んじられる勅撰歌集と大きく異なる特性である。『国書総目録』や『古典籍総合目録』に所載される以外にも『歌枕名寄』の写本は、現在数本存在が明らかになっている。その中に完本は存在しないが、一部であっても原撰本に近い写本が存在する可能性があり、また所在が明らかになっている写本の略抄や増補・改変の状況から、原撰本へと遡る可能性もあろう。

『歌枕名寄』は大部であり、『萬葉集』をはじめとする、種々の歌集・歌書を引載する。それらについても、写本の比較考察により、原撰本に近く誤りも少ない写本を比定し、その写本を用いて考察を行うことが肝要である。その過程で『歌枕名寄』の継承と変遷の道筋も明らかになるであろう。刊本と写本の間には内容に大きな隔りがあり、刊本は完本中最も原撰本に近い伝本である故に、刊本を考察の対象とするには慎重である必要がある。

(4) 『歌枕名寄』の特徴の一つとして、萬葉歌が多く所収されることがある。原撰本に

最も近いと推定する、細川幽斎が三条西家に伝来する『歌枕名寄』を写した細川本(永青文庫蔵)は、全歌数 1172 首(述べ数以下同)、うち長歌 138 首、短歌 1008 首、その他 26 首、表記は漢字本文表記 105 首、仮名表記 1033 首、漢字本文と仮名表記の混在が 34 首で、漢字本文表記の長歌は 65 首である。『歌枕名寄』より 20 年余り後に編纂され、所収歌数が遥かに多い『夫木和歌抄』に漢字本文表記が一首もないことに比べれば、非常に多いと言えよう。長歌は短歌に比して引用されることが少ないので、特に漢字本文表記の長歌は萬葉集古写本から直接引用された可能性が高く、『歌枕名寄』の成立年代を考えれば、萬葉集研究史上最も優れた校訂を行った仙覚の校訂本を、参照したか否かを調査考察することは重要である。

2. 研究の目的

上記の背景から、本研究は『歌枕名寄』の写本を、現在所在が明らかであるが、調査が及んでいない写本を調査し、『歌枕名寄』の写本における位置を考察し、『歌枕名寄』の継承と変遷を明らかにする。さらに所収萬葉歌、特にその長歌を取り上げ、『歌枕名寄』諸写本の特性、仙覚校訂本の影響を受けているか否かを考察し、萬葉集訓点史・享受史上での位置を解明することを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 『歌枕名寄』のテキストについては、これまで十二本(細川本・高松宮本・宮内庁本・内閣本・京都大学本・故澤瀉久孝蔵本(現皇學館大學附属図書館所蔵)・天理本一・天理本二・静嘉堂本・陽明本・佐野本・冷泉本(重要文化財))の系統を明らかにしたが、この他に十を超える写本がある。長崎県立対馬歴史民俗資料館宗家文庫蔵 歌枕名寄 巻 22 - 38 八戸市立図書館蔵 名よせ 酒田市立図書館光丘文庫蔵 歌枕名寄抄 故井上宗雄所蔵旧蔵 調枕名寄 巻 22-24

松浦武四郎記念館蔵(三重県松阪市) 陸奥歌枕名寄(重要文化財) 内藤くすり文庫(岐阜県各務原市)蔵 歌枕名寄 巻 1-7 国立歴史民俗博物館蔵 田中穰氏旧蔵典籍古文書 歌枕名寄 上中下 明治大学附属図書館蔵 名寄下 三室戸寺蔵『歌枕名寄』2 巻 学習院大学附属図書館蔵 雕蟲居本歌枕名寄 日本大学文理学部図書館蔵 頓阿法師名所集である。

(2) 上記 11 のうち、 について現地調査を行う。 はすでに翻刻されているものを用いるが、写真により確認し、 は現在所在が不明であるので、実見できないが、複写(井上氏より贈られる)を用い、 は写真を用い、 は影印版(辻勝美氏編)を用いそれぞれ考察を行った。猶、 については翻刻の上精査した。

『歌枕名寄』は大きく流布本と非流布本に分けられる。本研究においてもまず流布本か非流布本か、さらに刊本の写本かについて考察し、『歌枕名寄』変遷の過程を明らかにする。

(3) 『歌枕名寄』の写本毎の特徴は、最も多く所収されている萬葉歌に如実に現れる。故に各写本の所収萬葉歌の調査を行い、さらに、『歌枕名寄』所収萬葉集長歌を抜き出し、『歌枕名寄』写本間の比較及び校本萬葉集との比較を行い、その特徴を解明し、萬葉集訓点史・享受史上での位置を考察する。

4. 研究成果

(1) 11 の写本のうち、 は刊本の写本である。 の酒田市立光丘文庫蔵池田玄斎筆『歌枕名寄抄』は、安永 2 年庄内藩士の家に生まれた池田玄斎により書写された。目と耳を患い家督を弟に譲り、以後文筆に精励し、『病間雑抄』71 冊を著した。第 33 冊に『歌枕名寄』が、池田玄斎の在住した出羽国の極一部という僅かであるが、書写されている。同書第 15 冊の記述から鶴岡大山在の田中万春の所持する『歌枕名寄』であったと推察さ

れる。の井上本は上下二冊(『歌枕名寄』では近江国、巻22・23・24にあたる)、俳人木村騏道(?~文化7年)により、刊本の刊行された万治二年より100年余り後に書写された。は幕末から明治にかけての探検家である松浦武四郎(文化15年-明治21年)の書写によるもので、調査に携行する資料として必要な陸奥のみを写したものであろう。猶この書は松浦武四郎の他の文書とともに重要文化財に指定されている。も福井藩士佐藤誠(天保2-明治23)により福井を含む越前一国のみ書写された。これらは何かの事情により零本となったのではなく、意図的に必要な巻のみが切り出されたのである。これらは刊本の写しであるが、刊本そのままではなく、それぞれに書写した人物の改変が入っており、変遷の様相を示すものである。

(2) の八戸図書館蔵「名よ勢」(1巻)は、項目別に編纂された、『歌枕名寄』とは別の名所歌集であった。「潟」から始まり地名を項目別にいろは順にならべ国名を記し、歌語を抽出したもので僅かの証歌を引用したものである。

(3) 明治大学附属図書館蔵本は抄出本で、表紙に「名寄下」とある。東海道伊賀国に始まり、山陽道で終わる(但し東山道を欠く)。目録には西海道までである(未勘国を除く)ので上下2冊の抄出本であつたらしい。日本大学文理学部図書館蔵本は『頓阿法師名所集』の書名で登録されていたが、辻勝美・市橋さやか氏の調査により『歌枕名寄』の抄出本であることが明らかになった。山城国から伊豆国まで残る(山城国部も始めの部分は欠)。目録もなく省略されている地名・歌が多いので系統の判定には更に詳細名調査が必要である。

(4) は対馬宗家に伝えられたもので、永禄年間の書写とされるが、後半889首のみの抄出本である。「わぎもこ 美女」「むろのき 粉の木」など中世の注釈書や謡曲の影響を

受けた表記があり、作者名や集付に他の写本と異なる表記をするなど、個性的な内容を含む。

(5) の内藤記念くすり博物館大同薬室文庫蔵『歌枕名寄』は、漢方医中野康章(明治7-昭和22)の蔵書であった。巻1~6と7の一部のみの残欠本であるが(総歌数1541首)歌数の比較から、略抄の行われる以前の『歌枕名寄』を伝えている可能性もあり、貴重な一本である。

の三室戸寺蔵『歌枕名寄』は、巻四の途中から始まり巻五の途中で終わるという総歌数僅か268首の零本であり、流布本系と推察されるが、流布本にない歌を含み、或いは略抄以前の姿を伝える可能性もある。の国立歴史民俗博物館田中穰旧蔵本は未勘国部を除く36巻の抄出本である。一地名あたり数十首の歌を略する一方、『夫木和歌抄』から大量の増補を行っている。大幅な抄出と増補という矛盾する特質を持つ写本である。

(6) 『歌枕名寄』の成立は1280年代後半であると推定するが、その時代は仙覚校訂本が成立していたが、まだ流布するに至っていなかった。したがって、『歌枕名寄』所収萬葉歌は非仙覚本系を伝えている可能性がある。

『歌枕名寄』写本中、最も原撰本に近いと思量する細川本に所収される長歌138首(述べ数)を、細川本以外の写本との比較、萬葉集古写本との比較考察の結果、『歌枕名寄』が依拠した萬葉集は、紀州本と類似点を多く持つ、非仙覚系の一本であること、仙覚が初めて付訓したとされる新点歌152首を多く含むこと、その訓は仙覚訓とは一致せず、他の萬葉集古写本にも一致しないものであること、武田祐吉や上田英夫により、仙覚新点歌152首のかなりの数の歌が仙覚以前に付訓されていたことが、立証されているが、『歌枕名寄』の調査により、さらにその数が増えることなどが明らかとなった。中世名所歌集は多くあり、まだその研究は途についたばかりで

不明な点も少なくないが、所収萬葉歌の考察はそれを解明する重要な鍵となることを示した。

(7)本研究では『国書総目録』や『古典籍総合目録』に掲載されない『歌枕名寄』の写本をも含めて考察した。残欠本や欠本、零本が殆どであるが、その中には略抄以前の、より原撰本に近い『歌枕名寄』の存在を示唆する写本もあった。

これまでの12本の『歌枕名寄』諸写本の調査により、写本には流布本と非流布本があること、全巻完備の写本は細川本をはじめとする7本であり、他は欠本・残欠本・零本であることが判明している。本研究により、それに11本の写本を加えることができた。その中に完本はないが、調査により刊本を書写したものの、流布本に属するもの、非流布本に属するもの、いずれか判明しないものにわけられる。更に先の調査を加えれば、完本、抄出本(歌を省略する)、切出本(特定の巻のみを書写する)などに分けられる。切出本は偶発的な理由により、欠巻となったのではなく、意図的に特定の巻のみを書写するもので、一種の抄出と言えるが、全巻の歌を省略して小型化する本とは性質が異なるので、切出本と称した。

これは中世になり、著名な作品(『伊勢物語』や『源氏物語』など)において、量的拡大と量的縮小が行われているという、文学史の流れと、名所歌集『歌枕名寄』も軌を一にするということになる。

今後新たな写本の存在する可能性もあり、その調査考察が『歌枕名寄』をはじめとする名所歌集の通時的研究や、そこに所収される萬葉歌の訓点史・享受史へのさらなる関わりの深化の示唆するものであろう。

本研究では詳細な調査が及ばない写本もあるので、今後はそれを行い、翻刻した写本と資料編とし、論考を加え纏めたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計6件)

樋口百合子 『歌枕名寄』の継承と変遷
対馬歴史民俗資料館宗家文庫蔵本をめぐって 古代学 奈良女子大学古代学学術研究センタ 査読有 7号 2015 10-21

樋口百合子 『歌枕名寄』の周縁/終焉
学習院大学附属図書館蔵雕蟲居写本『歌枕名寄』をめぐって 古代文学研究第二次 古代文学研究会 査読有 24号 2015 50-63

樋口百合子 対馬歴史民俗資料館宗家文庫蔵『歌枕名寄』所収万葉歌の性格 古代学 奈良女子大学古代学学術研究センタ 査読有 8号 2016 60-70

樋口百合子 酒田市立光丘文庫所蔵池田玄斎筆『病間雑抄』中の『歌枕名寄』について 汲古 古典研究会 査読有 69号 2016 22-28

樋口百合子 中世名所歌集にみる『萬葉集』長歌の享受と特質 細川本『歌枕名寄』を中心として 上代文学 上代文学会 査読有 117号 2016 75-91

樋口百合子 翻刻 大同薬室文庫蔵『歌枕名寄』(上) 古代学 奈良女子大学古代学学術研究センタ 査読有 9号 2017 12-30

[学会発表](計1件)

樋口百合子 『夫木和歌抄』所収萬葉集長歌について 万葉文化館委託共同研究「万葉集を訓んだ人々、人々が訓んだ万葉集」 万葉文化館 2017.2.26

[図書](計2件)

樋口百合子(分担執筆) 中世名所歌集所収万葉歌の価値 万葉写本学入門(小川靖彦編) 笠間書院 2016 76-79 109

樋口百合子(分担執筆) 『歌枕名寄』所収萬葉集仮名書長歌について 非仙覚本と仙覚本をつなぐもの 万葉集伝本の書写形態の総合的研究 論文編 (田中大土編)

2017 9 - 21 78

6 . 研究組織

(1)研究代表者

樋口 百合子 (HIGUCHI, Yuriko)

奈良女子大学・古代学学術研究センター

協力研究員

研究者番号 : 90625493